

## 最終評価とりまとめ及び次期大阪湾再生プロジェクトの取り組み方針 (全体グループとりまとめ案)

### 1. 大阪湾再生行動計画 最終とりまとめ方針(案)について

- 1) 湾口部～湾央部は、栄養塩類(窒素・リン)が減少し、植物プランクトン(クロロフィルa)も減少傾向にある等、水質改善が進んでいる。一方、湾奥部は、依然として汚濁の改善が見られない状態であり、貧酸素状態もみられる。また、湾奥以外の海域においては、栄養塩不足の声が聞かれるようになった。
- 2) 底層における溶存酸素量(DO)や化学的酸素要求量(表層COD)に顕著な変化は認められなかったがDO悪化の原因となる汚濁物質濃度の減少や再生された干潟や浅場で生物の生息が確認される等、モニタリング結果において施策の効果と見られる変化が出ている。
- 3) 環境省等によるシミュレーションにおいては長期的に底層DO、表層CODが改善の傾向を示している。
- 4) 多様な主体との連携においては、海・川・山の住民参画による取り組みへの参加者が増え、環境にふれあう場が拡大している。

### 2. 次期大阪湾再生プロジェクトの取り組み方針(案)について

森・川・海のネットワークを通じて、美しく親しみやすい豊かな『魚庭(なにわ)の海』の実現に向けて、引き続き以下の項目についての取り組みの推進や課題を踏まえ、行動計画を取りまとめる。

- 1) 大阪湾の水質は改善傾向にあるものの、閉鎖性海域の水環境改善には時間がかかり、これまでの施策(流入負荷総量削減、浮遊ゴミ回収、汚泥浚渫、窪地の埋戻し、浅場・干潟・藻場の造成等)の継続・充実が必要。
- 2) 湾奥部と湾口部・湾央部では、水質改善や栄養塩減少の程度の違いが大きく、水質の改善と生態系の回復に向けて、異なるアプローチが必要となるため、各エリア毎の取り組み方針を明確にしていく。
- 3) わかりやすい指標を用いて評価することにより、多くの人が海を楽しみながら手軽に環境のモニタリングができる目標の再設定の検討を行う。
- 4) 大阪湾を取り巻く各種計画・施策の展開を見据え、早期に既存の協議会や市民・NPO団体のネットワーク組織、また、学識者や企業、漁業者など、大阪湾再生を目指す多様な主体との連携・協働等の仕組みについて、検討を進める。
- 5) アピールポイントについては、他の施策・イベントとの連携企画、広報による誘導が必要であり、より一層、一般市民が身近に体感・実感できるスポットとして、利用促進の充実が必要である。